

OMC事務局 〒560-0085 豊中市上新田4-16-1-33 合原 一夫 TEL06-6833-9227
 広報編集局 〒573-1171 枚方市三栗1-18-20 前田 茂夫 TEL072-850-5781
<http://www.ne.jp/asahi/smaeda/12/>

平成19年1月 (²⁰⁰⁷~~2006~~年) No.493

<新年ご挨拶>

「今」を大切に

今年も充実した年でありますように

会長 合原一夫

明けましておめでとうございます。皆さん良いお正月を迎えられたこととお慶び申し上げます。一年の計は元旦にあり、等とむかしから申しますが、このところ目まぐるしく変化する映像の世界では、なかなか一年分の計画を立てて行くことは難しいようです。新しい映像機器も、いつ買い替えたらいいか、すぐに新方式の良いものが出てくるのではないか、もう少し待った方がよいのでは、等と迷うものです。半年もしないうちに新しいものが出てくる現状では致し方ないのですが、一方、考えてみれば、私も含めて皆さん年々、年をとってきて体の方があちこちほころび始めて、重いカメラや三脚もしんどくなって参ります。

そう考えますと、あまり先の方を目標とするより「今」を大切に、今年をどう充実させた生き方をした方がよいのかを考える方が、私たちの年令にとって相応しいのではないかと、そんな気がします。

まあ、機械のことはともかくとして、今年の一つ身近なテーマに的をしばり取り組んでみる、というのも充実した人生の生き方のようにも思えます。機械というハードな世界に目を向けるもよし、作品というソフトの面を重視するもよし、なにか目標を持って頑張ってみる、という「一年の計は元旦にあり」はいかがででしょうか、本年もどうぞよろしくお祈りします。

1月例会は第3日曜 21日13時より

---お間違えなき様ねがいます---

1月例会は恒例により難波市民学習センターにて、第3日曜日 21日の13時より開催、引き続き総会を行います。いつもの通り作品をお持ち下さい。今年も楽しい例会の幕開けとしましょう。

■新年会は17時過ぎより5階のスーパードライ難波にて

例会及び総会終了後は、席をすぐ上の階にある会場に移して新年会を開催します。出欠ハガキ未提出の方は急ぎ出してください。

前田会員の記事が ビデオサロン1月号に

ビデオサロン1月号に、前田さんの余部撮影にかける情熱を伝えた記事が掲載されています。玄光社からわざわざ記者が前田さんと余部まで同行し取材されました。これを機に余部鉄橋が全国のビデオ愛好家に注目されるようになるかも知れません。昨年のOMC撮影会をタイミングよくこの地で行ったものと思います。

例会記録のあれこれ

■5年間の例会記録

年度	会員	1例会あたり		年間 作品数
		出席数	作品数	
14	37名	26.4名	11.3本	135本
15	40	26.1	12.3	147
16	40	27.6	15.2	182
17	41	28.8	14.9	179
18	41	27.4	14.5	174

■テープ方式の変化

年度	DV	ワト ⁺	ハイ ビジョン	計
14	135本	0本	0本	135本
15	142	5	0	147
16	151	24	7	182
17	117	40	22	179
18	50	47	77	174

上表から見ると、このところハイビジョン(HDV)が急速に増え、標準の4:3のDVを追い越してまいりました。特に、18年度上期がHDV31本(35%)だったのに対し、下期は46本(54%)と急速に伸びており、OMC会員諸氏のハイビジョンにかける情熱の程が伺われます。これはカメラが比較的買い易くなったことでもあります。例会でHDV作品が上映できる機材環境がととのってきたという要因が大きいと思います。この点、デッキをご提供いただきました黒田会員に感謝申し上げます。さあ、今年はどうなるでしょうか。

DVがどこまで減るか見ものですね。

第20回日本を縦断する映像発表会

2月4日(日曜)12時より大阪市立中央図書館にて開催されます。全国のアマチ

ュア映像作家による映写会で、作品づくりの参考になると思います。合原会長の「東さんガンばる」と黒田会員の「エベレストに魅せられて」が出品されています。

12月例会のレポート

今月は第4土曜日が祭日で夜の貸室がありませんので、止むなく第3土曜16日となり、若干集まりが悪いのではないかと懸念されましたが、今年最後の師走例会とあつてか29名の多くの方々と17本の作品が出品され、司会の安居世話役も大忙しの例会となりました。今月もHDVが9本と過半数を超え、時代の流れを象徴する締めくくりの内容でした。司会、安居氏、書記、関氏、機材は江村、増池、河合の3氏。受付兼照明係は渡辺、奥の両氏でした。

■出席者：有村、石垣、江村、岡本、奥、上総、紙本、河合、黒田、合原、進藤、関、鉄具、西井、華岡、藤原、前田、増池、森、松本、宮崎、森下、森田、安居、山本、錦、吉岡、渡辺、井上の29氏。

■上映作品(今月の講評は関世話役です)

1. 淡路瓦

吉岡貞夫さん 9分20秒

良質の粘土が採れる日本の三大瓦産地のひとつ。鈍い銀色の光沢を放つ「いぶし瓦」が淡路瓦の特徴。名だたる社寺の巨大な鬼瓦もほとんどがここの「鬼師」の職人わざによるものという。一種の「出来るまで」ビデオだが、粘土の採掘現場、数種の粘土を混合する配合処理工場の模様、自動化された平瓦の製造過程などをインタビューも挿んで、分かりやすく構成されていた。

2. 佛の眼

河合源七郎さん 6分10秒

中国・広元、皇沢寺の千仏窟などは観光客があまり行かない場所、と作者。至る所で撮影を制限する中国だが、このあたりは案外おおらかならしい。どこか抽象的意味合いを含む琵琶の音と仏の顔、顔、眼、眼。<何かあるな>…そこからの展開を期待したが、結局なにも起きなかった。眼は口ほどにものを言い。の諺がある。多くの仏の眼に接した作者が感じたこと、それはいったい何だったんだろう。

3. キャンドルナイト

増池 茂さん 6分30秒

年の瀬になるとあちこちで趣向をこらしたイルミネーションが夜の街を飾る。「通路」以来、西梅田に執着する作者だが、そこはさすがに手慣れたもの。撮るべきポイントをしっかり心得ていて、描写も微細でそつがない。だが最後の後始末は足で踏みつける乱暴なもの。大切な作品の余韻まで踏みにけにしまった。

4. 東さんガンばる

合原一夫さん 17分00秒

有明海で海苔の養殖業を営む夫婦が変りゆく海と付き合いながら苦難を乗り越える姿を描いたヒューマン・ドキュメント。たしか昨年一度拝見した作品だが、第20回日本を縦断する映像発表会に出品するため一部手直した。と言うことで再度のお披露目となった。やっぱりいい作品は時間を感じさせない。

5. トン族を訪ねて

山本正夢さん 9分30秒

白いペールのような霞がかかった中国・貴州省の朝の田園風景。のどかな山あいには緑の棚田がどこまでも続く。「木の民」と呼ばれるほど木造建築に優れた技術を持つトン族。村の中心的建造物の鼓楼や風雨橋の楼閣は釘などは一切使っていないと言う。少数民族の大方がそうであるように、ここでも働くのは女。日がな一日ぶらぶら過ごす男達の様子を執拗に追っていて面白い。珍しい風物をただ表面的だけでなく、いつも生活の一部に入り込んだ取材を心がけている作者の映像はやはり一味違う。ただ隣町の市で群衆が真剣な眼差しを送っていた視線の先は一体何だったのか、結局判らずじまいだった。

6. 石見銀山の里 (ワイド)

紙本 勝さん 11分25秒

島根県のほぼ中間の山あい。知られてはいるものの交通の不便さとやや地味な対象のせい、ほとんど作品として見たことがない。良質の銀を産出して幕府の直轄だったとか。いま世界遺産登録を目指しているそうだ。作者は取材対象が決まると徹底して調べ上げるのだろう。関係のあるものす

べてを網羅する映像と詳しいナレーションはいつもながら感心する。

7. 雨の晩秋 (ワイド)

渡辺雄史さん 4分08秒

芭蕉の句碑に“石山の…”とあったから場所は石山寺か。傘をささない人もいて画面も比較的明るかったので多分雨上りだろう。紅葉の終期らしく地面はぬれた落葉が絨毯のようだった。ついでだから葉や枝のしずくを周囲の景色が写るくらいドアップで撮ればよかったのに。

8. 前田茂夫が撮る余部鉄橋 (ワイド)

玄光社(参考出品) 10分00秒

「Sigeo Maeda:AMARUBErailroad bridge」と、画面の下に帯状のさぶとんに書かれたテロップ。前半は雪が舞うシーンから始まり、四季それぞれの表情を見せる鉄橋の上を赤い普通列車、特急はまかぜ、あまろペロマン号などが通過。それを様々な角度から撮った前田さん会心の映像が続く。後半は玄光社編集長自身が余部鉄橋の撮影に向う前田さんを同行取材。前田さんが撮影ポイントによじ登るところなどの映像をはさみながら編集長の質問に答えるかたちで、撮るようになったきっかけ、のめりこんだいきさつ、そして変りゆく姿を想像して、消滅するものへの愛着心を熱っぽく語る。前田さんが表現したいもの。それはまさに「滅びの美学」だろう。月刊ビデオサロン誌 2007年1月号の連動企画として「人物クローズアップ」にこの記事と写真が載る。

9. 紅葉の鞍馬路 (HDV)

奥 宏さん 6分30秒

実際のトンネルと錦繡のトンネルを交互に抜けて走る叡山電車。もっとも良い時期に行かれたようだ。由岐神社の鳥居から鞍馬寺まで結構きつい坂道と石段が続くが、撮りながらだからそんなに負担を感じないのかも知れない。毎月新作を出される作者の意欲は敬服に値するが、対象が変わってもどこか一本調子でめりはりがなく物足りない。毎回同じ(?)か似たような音楽のせいもある。

10. V I A 鉄道 (HDV)

関 剛(筆者) 12分50秒

トロントからジャスパーまで二泊三日の

カナダ大陸横断鉄道「カナディアン号」に乗った。しかし週にたった3便しかない列車の走る全景を離れたところから撮るのは不可能。だが客車22両のうち、ドーム状の展望室が屋根から突き出たサロンカーが4両あり。そこからの撮影で単に「乗りました記録」にならずに済んだ。

11. Island Breeze (HDV)

井上勝彦さん 10分30秒

ハワイのリゾートホテルが3箇所。プライベートビーチと緑豊かな庭園。そこを自作された移動撮影装置にカメラを取り付けて撮られている。スタビライザーと名付けたその装置がチラッと映像にでてきたが、以外と構造が簡単で小さく、しかも軽そう。すばらしいのは移動する画面が実に滑らかなこと。市販のハンディマンとかステディカムは、かさばって重く、撮った映像もかなりガタつく。その構造に皆さん関心か有るはず。差し支えなければ公開していただけたら有り難いのだが。

12. F X-7 試し撮り (HDV)

上総修一郎さん 2分00秒

「飛鳥」で旅行されたときの映像だがパソコンの調子が悪く編集を中断。この撮影に使用したソニーの新しい小型ハイビジョンカメラの画質検証の意味で例会出品。

13. 育ちの故郷 (HDV)

進藤信男さん 8分10秒

白鳥、コウノトリ、そして今回の鶴と、作者がいつも選ぶのは主として大型の鳥。飛翔するあの優美な姿に魅せられたのだろうか。しかも回を追うごとに撮影は的確になり、かつ構成もしっかりしてきたように思う。なべ鶴が飛来し越冬することで知られる鹿児島県の出水。はやくから地域住民と行政の協力で鶴が定着できる環境づくりに取り組んできたが、その甲斐あってか、刈り取ったあとの田圃に数えきれない程の鶴が舞い降りる。しかし実情は一極集中。1万羽を越える鳥が空をうめ尽くす様はまるでヒッチコック映画。つまり昼夜を問わず鳴きやまぬ騒音と農作業への影響が付近の人々を困惑させている。新幹線の駅ができ、観光で町の活性を期待する側と、それ故に忍耐を余儀なくされている農民たち。

たしか作者もこのような意味のことを最後に言っていた。「このジレンマの解決は並大抵ではない」と。

14. 秋の奈良公園 (HDV)

有村 博さん 8分49秒

かつてご自身の作品に幾度となく登場したショットとアングル、そしてこの季節。作者としては通い慣れた所で公園の隅々までご存じなんだろう。だから被写体に対してどこから撮ればベストなのかを心得ておられるようだ。

15. 紅葉と観音さま (HDV)

西井 学さん 6分10秒

琵琶湖の北東にある己高山は近江の国の鬼門にあたることから奈良時代にこの辺りを霊場とみなし多くの寺が建てられたという。いまも観音めぐりツアーがあるほど十一面観音の多いところ。作者はそのうち鶏足寺、渡岸寺、石道寺にスポットをあて、無難な画づくりをされていた。

16. 余部の秋 (HDV)

江村一郎さん 5分50秒

このところ毎週のようにどこかの新聞が記事にし、テレビのニュースでとりあげ、蟹とセットになったツアーの広告が日ごと目につく。あげく、いまやお立ち台は入場制限するほどの混雑。これにはびっくり。中にはマナーの悪い輩もいるだろうから地元農家から苦情が出て仕方のない状態。余部はもう、二人のマニアによって撮り尽くされた感だが、作者のファインダーが切り取った構図にはまた別の世界があった。やっぱりこの人はただものではない。

17. 嵯峨野上り下り (HDV)

森田光春さん 10分00秒

久々の国内映像。トロッコで亀岡へ。と思ったが転換して、保津峡から嵐山へ引き返し、嵯峨野の寺を巡っていて再び転換。亀岡の船のりばへ。そして川下りの船上という編集だった。対象により、あえて順序にこだわらない作者だが、これは何か勘違いをされているのだと思う。

以上で例会を終了し喫茶組と居酒屋組に別れてそれぞれ二次会を楽しみました。